
転換の魔剣

卯ヶ島 名雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転換の魔剣

【Nコード】

N3522BA

【作者名】

卯ヶ島 名雪

【あらすじ】

そこは一つの滅びゆく王国であった。

帝国の策略により、王族は次々に殺され、最早変えようのない現実となっていた。

始まりは師団長の裏切り、国王の殺害、各拠点の制圧など、為すすべもなく帝国に王国は支配されていったのだ。

そんな、既に帝国に塗り替えられてしまった国に一人の青年がいた。

彼の名はジーン。

今でこそ落ちこぼれ、酒場に入り浸るような人間だが、昔は王国に仕えていた元騎士だった。

この物語は、そんな彼が如何にして帝国に立ちはだかり続けたか綴るものである。

一幕

とある場所に、対立した者達がいた。

謁見の間と言われる場所だ。

そこに、一方には生きている者が一人と既に事切れている者達が二人、玉座と言われる位置に佇み、その周囲にも既に息をしていない者達が数名存在していた。

また、もう一方には数え切れない程の数の者達が扉から溢れかえっていた。

既には殺気立った状態で、多人数である者達は各々の武器を構え、今この時にも襲ってきそうな雰囲気であった。

しかし、玉座の方に至っては武器を構えるどころか、既に戦意喪失してしまっていた。

だが、これは仕方ないことだとも言えた。

何故なら残りの二人は国王と王妃。

本来護らなければならない者達が既に息をしていないのだ。

彼はもう戦う理由を失ってしまっていた。

そして唯一生き残ったその人物は、二人の亡骸の前に出て未だ庇い、武器を構えることはしないが、対立した者達を睨みつけるのであつ

た。

「……何で、何でなんですか。どうして、反乱なんてことを、っ！」
不意にその人物が対面しているとある人物に声を荒げる。

「仕方ないこと、と言えば納得するか？」

その人物は大勢の殺気立った者達の一步前に佇み、彼が指揮官であると三人に見せつけていた。

「理由になってません！……師団長！」

庇う彼は尚も訴えかけ、そして悔しさから歯を食いしばる。

「変革を時代が求めているのだよ。そのためには、この国に蔓延る王族を消さなければならぬ。だからそこを退け、ジーン」

師団長と呼ばれた者はさも憂えているとばかりに、ジーンと呼ばれた庇う彼に芝居掛かった言葉を投げかけた。

「変革？ 冗談じゃない！ 何故平和なこの国に変革をもたらす必要がある！？ この国に必要なのはこの平和を維持し続けることであって変革なんてものじゃない！！」

しかし、ジーンはそれを手を振り払う身振りとともに、断固として否定した。

「国が発展するには平穏では駄目なのだ。歴史を紐解けば分かるこ

とだろう？ 発展とは戦や革命によってするものだ」と

だが、師団長は歪んだ笑みを浮かべ、ジーンに諭すように問い掛ける。

「お前もこちらに來い。お前はまだ若い。才能もある。殺すには惜しい人材だ」

更に、まだ齡十八と年若いジーンに形だけなのか本心なのかはわからないが、誘いを掛けた。

「……帝国」

師団長のそれに、しかしジーンは一つの考えが唐突に浮かんだことから違う言葉で答えることにした。

それは思わず師団長が目を見開いてしまうものだった。

「何？」

「帝国が絡んでるんですよね？ いや、この国の貴族もか」

ジーンはやはり正解か、と拳を握り締め怒気を更に深めた。

「ほう、その顔からして知っていたのか」

「知っていたと言うよりは、可能性として思いついただけです。…まさか事実だとは思いませんでした。あなたが帝国の人間だということも今の今まで気付けませんでしたよ」

師団長が感心したような口調でこの事を何とも思っていないと分かる、守る相手も居らず戦意喪失していたジーンも最早我慢の限界だった。

しかし同時に、だからと言ってこの人数差で下手な真似はするべきではないということも理解していた。

切り抜けることは出来る。

逃げることは出来る。

だがそれでもジーンはそうしようとは思わなかった。

いや、心の片隅にある本心は逃げたい死にたくない、等と訴えているのだが、それだけはジーンの矜持が許さなかったのだ。

「ふむ、やはり惜しいな」

師団長は今一度ジーンをじっくりと見据える。

動く邪魔にならないようにした茶色の短髪。

少し視線を下げれば、眼光の鋭き赤茶色に光る瞳と、若さに似合わず精悍な顔付き。

更に身体に関しては無駄なものを削ぎ落としたかのように鍛え抜かれ、それに加え一片の隙もない動作は流石と言えた。

「だが、それ故に消しておきたい存在でもある、か」

師団長は見据えていた眼をスツと細め、自嘲混じりに呟く。

「……自分は、あなたを許しはしない」

その間に、ジーンも一つの覚悟を決めていた。

「覚悟は出来た。最後の最期まで抗って抗って、抗い続けてやりますよ。そのためなら、自分の下らない矜持は捨てさせて頂きます」

ジーンは師団長に向かって、腰に差していた己が騎士になった時に師団長から貰った剣を勢い良く抜いた。

そして、ジーンはこの時、騎士の道を捨てる覚悟をも決めていた。

「……残念だ。殺せ」

師団長はそんなジーンを憐れんだ表情で見つめ、部下に前を譲った。

師団長は思う。

確かにジーンは国随一の実力者であり、国唯一の魔剣所有者、個としては上位或いは最強の部類に入るかもしれない。

だが、結局はそれだけだ。

個では軍には適わない。

一騎当千だとしてもそれは変わらない、変えられない。

そう確信していた。

事実それは正しかった。

ただ、予想以上の被害を出す羽目になったことと、ジーンが戦う道を選ばず逃げる道を選んだことが、想定外の出来事であったというだけだ。

「ふん、考えたものだ。まさか、一人の死者も出さないとは。……いや、今回はそちらの方が効率が良かったのか」

師団長はジーンと部下の乱戦を傍観しながら、ジーンの闘いに関心を寄せていた。

ジーンは抜いた剣で、関節や利き手、戦闘不能状態に出来るだけの傷を相手に負わせ、身動きを出来なくさせると言う闘いをしていたので。

これによって最小限の闘いで扉まで辿り着いていた。

そこでジーンは何を思っただか謁見の間に振り返ると、師団長を見据える。

「師団長っ、自分は何時か必ずあなたを止めてみせる！ 必ずだ！」

そう口にしたジーンは持っていた剣を師団長目掛け投擲すると、今度は振り返らずに逃げていった。

師団長はそれを己の剣で叩き落とし、鼻で笑う。

その後、師団長の部下も追走しようとしたが、師団長はそれを敢えて止めることにした。

「追うな。今は奴一人に人も時間も割くわけにはいかない。放っておけ」

「しかしっ」

「構わんさ、奴は騎士の道を捨てた。腐るのも時間の問題だ。それに、奴一人で何が出来る。気にする必要はないさ」

こうは言ったが、師団長は不意に思ったのだ。

ジーンは生かしておくべき人間だと。

理由はない。

だが、確かにそう思ってしまったのだ。

奴は何か、やるべくして産まれてきた存在なのだと。

それが帝国に仇なす存在としてだとしても。

師団長は思う。

もし、こんな惨劇を起こす前に帝国を裏切って、ジーンとともにこの国を守っていたらどうなっていたのだろうか。

きっと、どんなことよりも誇らしい事だったに違いない。

しかし、それももう過ぎ去ったこと。

そうして、師団長はその下らない考えを振り払い、これからのそれに気持ちを切り換えていった。

過ぎ去った日々は覆らない。

ならば、その時その時を全力で生き抜くべきだ。

そうして、いま現在を、いま未来を築き上げていくことが出来る。

だが間違えるな、過去は後ろではなく、何時も隣にあると言つことを。

一幕

そこはとある町のとある酒場。

下らない喧嘩やそれをやし立てる声、時には笑いも混じり、賑やかなそんな場所に落ちぶれた酔っ払いが一人。

片手に安酒を持ち、カウンターにて酒場の主人に今日も絡み続ける。

「なあ、マスター、聞いてくれよ。俺もね、昔はそりゃ強い騎士様だったわけよ。」

「お前はまた、飲み過ぎだ。帰れ」

酒場の主人ももう何度目かの目の前の酔っ払いの話に、溜め息混じりに追い払おうと短く言い放つ。

「マスター、そりゃねえよ。こっちはさ、真剣によお、話してんによお」

明らかに酔って訳が分からなくなっている客に、主人は頭が痛くなる。

「いいから今日は帰れ。早めに帰れば良いこともあるかもしれないぞ」

「んなわけない！俺の人生はもう死ぬだけだっ」

客は尚も喚くだけで帰ろうとせずに、カウンターをドンツと叩く。

「いいから」

「おう、マスター。この酔っ払い追い払ってやるうか。毎度毎度、うるせえにも程があんだよ。迷惑だ」

再度主人が帰らせようとしていると、一人の大柄な体格をした男が近寄ってきた。

「いや、こちらで何とか」

「うるせえのはお前だっ、この熊みてえな格好しやがってよお」

主人がこれ以上の面倒はと、断りをいれようとするが、先に酔っ払いの客が大柄な客に突っかってしまっていた。

「舐めた口叩くじゃねえか。追い出すだけで許してやるつもりだったが、気が変わった。暫く動けない身体にしてやるっ」

大柄な客は思いつ切り腕を振りかぶり、その客に振り落とす。

しかし、その客によってそれはいとも簡単に受け止められてしまう。

更に、大柄な客はそのまま重心をずらされ、見事な足払いに盛大に転けさせられていた。

見物していた客も含め、辺りは静寂に包まれる。

「っ……………マスター、勘定。酔いも醒めたわ」

そんな事など気にもとめないその客は、硬直している主人に懐から多めに金を取り出しカウンターに置いた。

その後すぐに、酒場を出て行ってしまった。

主人はハツとその金を受け取り、大柄な客を助け起こしに行く。

「くそつ、あいつ何者だ。動きが素人どころじゃなかったぞ。マスター、あいつ名前は？」

大柄な客は頭を打ったのか後頭部をさすりながら主人に問う。

「バグ、聞いてどうする気だ？ やり返す気なら教えるわけにはいかないんだが」

主人は怪訝そうにバグと呼んだ大柄な客を見やる。

「んな小せえことしねえよ。ただ、興味が湧いたんだ」

「ふむ、まあ、お前はそんな事する人間じゃなかったな」

バグと呼ばれた客の眼から事実だと伝わってくるのが分かった、主人は自らの発言を訂正した。

「私もよくは知らないが、確か名前はジーンとか言っていたと思う」

そして、前に教えられた名前を頭から引っ張り出し、バグへと教えてやる。

「ジーンね……。まさかな。マスターもう一杯酒くれや」

バグは聞き覚えのある名前に考えを巡らせたが、肩をすくめると再び酒の席に戻っていった。

そんなバグに、主人は首を傾げながらも新しい酒を提供するのだった。

ところ変わって、まだ日も暮れず明るい道をジーンは思いの外しっかりした歩調で歩いていた。

ジーンにはこの町に家はない。

現在は日雇いの仕事をしながら安宿に滞在している。

そのわけは、城から流れ着いた先が此処だったと言っただけだからだと、話が逸れてしまったが、ここでジーンはある出逢いをする事となる。

それは、突如ぶつかってきた子供が始まりだった。

「おととと、大丈夫か。って、おいっ」

その子供はジーンに声をかけられたのを無視し、全力で走り去っていったのだ。

そして、ここでジーンは酔っていたというのもあるが、油断してい

た事に気付く。

「んあ？ げっ、財布が」

そう掏摸すじにあつたのだ。

「仕方ない、追いかけるか」

全財産が入った財布がなければ生活のしようもないジーンは溜め息を一度吐いた後、子供が逃げた方角へ踏み出した。

その後、数分で子供の姿を捉えたジーンは気配を消して静かに近寄っていく。

しかし、そこは路地裏とも言うべき場所だったが、所々侵入者除けの細工が施され、ジーンもなかなか子供に近寄れないでいた。

そうして、そんなこんなをしていると、どうやら子供は自身の目的の場所に辿り着いたようであった。

ジーンはこれは好機だと、一気に距離を縮め子供を捕獲する。

「なっ！ くそっ、誰だ。離せっ、この！」

突然のことに、子供は大慌てして暴れて逃げようと躍起になる。

「暴れるな。俺はただ、財布を返してもらいに来ただけだ。財布を返すなら何もしないから」

「誰が返すか！ この、このっ」

ジーンの言葉に子供は自分を捕まえているのが何者であるのかを理解した。

その上で更に暴れ、逃げ出そうとする。

「だから暴れるな。怪我しても知らないぞ」

ジーンが未だ暴れる子供に嘆息していると、近くの廃れた小屋のような所から一人の少女が姿を現した。

「アル、どうしたの！？」

「出てくるなっ、シーラ！ 隠れてろ！」

少女にアルと呼ばれた子供は、焦りを帯びた表情で暴れるのも止め、ひたすら叫ぶ。

しかし、それも時すでに遅く、ジーンの目前にシーラは出て来てしまった。

だが、動きを止めたのは何もアルだけではなかった。

ジーンも有り得ない人物との遭遇に、何時の間にかアルを放していた。

「……………王女、様……………？」

「っ、誰!？」

ジーンが衝撃のあまりポツリと呟いた言葉に、シーラと呼ばれた少女は一気に警戒を強める。

そして、ジーンが放心状態になったのをチャンスとばかりに、アルは急ぎシーラの前に庇うように立つ。

ジーンが正気を取り戻した頃には、二人の少年少女は強い警戒感のもとジーンから一歩また一歩と逃げるため退いていた。

「まっ、待ってくれ! いや、待ってください! 俺、自分は元第一師団所属のジーンという者です。師団階級は千騎士でした」

それだけは何としても防がなければならない。

そう思ったジーンは必死に騎士の頃の口調に戻し、少しでも警戒を解こうと正体を明かす。

「第一師団、千騎士っ。裏切りの部隊ではありませんかっ!」

「なっ! それは違います!! 師団の自分の戦友は裏切りなどしておりません。我が第一師団で裏切りをしたのは師団長と直属の部下だけです! 例え姫で在らせようと、その言葉は我が戦友に対する侮辱に他ならない!」

憎しみに苛まれたシーラの言に、ジーンは思わず僅かながらも殺気の混じった怒りをぶつけてしまう。

「ひっ」

「っ、すみません。感情的になり過ぎました。ご無礼をどうかお許し下さい」

シーラの怯えた表情に、またもジーンはやってしまったと落ち込むと、ここで先程から話しに入ってこれなかったアルが二人の間に入り、シーラを後ろにやりジーンを睨みつける。

「シーラ、話はよく分かんないけどこいつは悪い奴なのか。シーラを虐めるのか」

「アル……」

シーラはそんなアルを見て漸く平静を取り戻すことが出来た。

「ふう、いえ、彼は善い人間よ。さっきは私が勝手に早とちりしてしまっただけ。ジーンさん、すみませんでした」

「いえ、こちらこそ申し訳ありません。突然の事態に我を忘れていました」

何とか話しを出来る状況に、ジーンは人知れず安堵していた。

「やっぱ、よく分からないけど問題ないならいいか」

アルはシーラ言葉に嘘偽りが無い事を理解し完全に警戒を解き笑みを見せる。

「それより、財布は返しなさい。アル」

しかし、そうは問屋がおろさない。

先程の会話を思い出したシーラが、アルの首根っこを逃がさないように掴む。

アルは引きつった顔でシーラを見つめるが、色よい返事がもらえないことを理解すると渋々ジーンに財布を手渡す。

「えっと、ジーンさん良かったら上がっていきますか」

それを確認したシーラは出来の悪い弟のような存在のアルに拳骨を一発。

次いで、ジーンに声をかけるのも忘れない。

「はい、出来れば。それと、自分には普段の口調で構いません。元とは言葉、間接的にでも主従を結んだ間柄になります故」

ジーンは初めからそのつもりだと頷き、主君に対するような対応に切り替える。

「でも……」

「お願いします」

それはシーラにとっては少し重荷になるような行為だった。

しかしジーンはそれを承知で頼んだ。

「分かりました。出来る限りそうします」

「はい」

シーラはジーンの気持ちを理解し、その思いを感じ取って、手を差しのべる事にした。

ジーンは思う。

今度こそは、己の全てを掛けて守りきるのだと。

人は人生の選択の中で中途半端なもの、すなわち諦めや妥協をしてはいけない。

それは人生の中で人の成長を妨げる役割しか持たないからだ。

人は人生の中で確かな選択をするべきである。

それは意志を強く持つことが出来、人を際限なく成長させられるからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3522ba/>

転換の魔剣

2012年1月14日01時03分発行